

# 残像の脈々

～vol.3～

元々この「残像の脈々」ですが、  
「Withering to death.」と「UROBOROS」の公開に合わせて、  
それぞれ一回ずつ計2回に渡ってお届けする予定でした。  
ですが、思いのほかページ数がどんどん増えてしまい、  
急遽LVJの川上さんに頼み込んで  
2回ずつ計4回の連載に増やして頂きました。  
それはそれで良かったのですが、  
今度は締切との格闘をしながらの執筆になってしまい、  
自分でも2回で終わらせておけば良かったかも、、、  
と若干の後悔しております。  
ですが、こういう機会は滅多にないので、  
移動中の新幹線や飛行機の中など  
なんとか隙間を利用して書いております。  
後はネタがどこまで保つやら。  
最悪の場合は、文字と挿絵をやたらデカくして  
ページ数を稼ぐつもりです。

ですので、寛大な気持ちで見守っていただけたら嬉しいです。

## インタビューとイメージ映像 其二

---

さて、本題に入ります。

前回のvol.2ではShinyaさんとタクシーの中で機材についてお話ししたエピソードをお伝えしました。

ついでにと言っはなんですが、  
ここではベルリンでの撮影機材について  
少し触れていきたいと思ひます。

日本から持参した機材は、ベルリンでの移動などを考慮してなるべくミニマムかつハイクオリティという目標をたむPと掲げ、SONYのFX6というプロ用のカメラとiPhone15 proの2台のみ。

あとレンズを4本と、インタビューには欠かせない  
ピンマイクです。

ライブ本番の収録は様々な機材がりましたが、  
ドキュメントとインタビュー、更には実景も  
この2台で撮影していきました。

SONYのFX6で撮影した素材は当然の如く、  
スクリーンに十分耐え得るくらい美しい画質でした。

iPhoneもそれに引けを取らないほどの画質で、  
カメラとして十分ポテンシャルを發揮してくれました。

ではどこのシーンでiPhoneを使ったのか？

疑問に思ふ方もいらっしやると思ひますが、  
実はドキュメントシーンの半分ほどは使っております。

例えば、

薫さんがバスの中を案内してくれるシーン、  
インタビュー映像のメンバー用の広角サイズで捉えたカット。

他にもまだまだあります。

それなりに細かな設定は必要ですが、  
今回のような現場では、とても臨機応変且つ、  
カメラとして十分クオリティの高い映像が撮影できたので、  
とても重宝しました。

iPhoneがどこで使われたのかを意識してまた鑑賞するのも  
面白いかもしれません。

Shinyaさんとの撮影の後、

一度ホテルへ戻ってDieさんと合流。

日没の時間を考慮してホテル周辺の路上などで撮影の予定、  
のはずだったのですが、、、

Dieさんから「中心街で撮影するのはどうか？」

と提案をいただき、

急遽タクシーでベルリン中心街へ。

またしても前日のロケハンが撃沈、、、www

とはいえ、

僕自身、街で撮影できたらいいなと思っておりましてし、

ましてやご本人から

リクエストをいただけるとは思ってもみななかったので、

とても助かりました。

中心街までのタクシーの中、  
Dieさんはじめメンバーと僕の最初の出会いや、  
同行させていただいた2013年のヨーロッパツアーとアメリカツアーの  
思い出なんかをお話ししていました。

実はこの時カメラを回していたのですが、  
作品全体の内容や前後の流れを考慮した上で、  
泣く泣くカットしました。

思い出話に花が咲いたのも束の間、タクシーは街に到着しました。

流石に中心街ということもあって賑わっていましたね。  
日本で例えるなら、原宿と銀座をごちゃ混ぜにしたような、  
若々しさとエレガントさが混在しているような街でした。

その街を30分ほど散歩しながらのインタビューです。

人が多かった分、難しい撮影でした。

カメラの液晶モニター越しのDieさんを見ながら  
並行して歩いてカメラを回す。

なので前方を見ることがきかないのです。

時折、行き交う人をスッと上手くかき分けながら、  
そして街灯に激突しながらの撮影でした。

(ピントが甘いのはそのせいですが、とここで言い訳をしておきます。)

後は、皆さんご存知の通り、カフェでの撮影です。

そうです、**あのでかいビール**です。

散歩の途中、路地裏にあるいい感じのカフェを見つけたので、  
ここで撮影しようということになったのです。

席に着くなり、ビールで乾杯する2人。  
映像でも伝わっていると思いますが、  
時折Dieさんの横を通り過ぎる歩行者がリアルと言いますか、  
より海外感を感じますよね。

5人の中では一番リアルな、  
ドイツの雰囲気が出てるシーンになったのではないのでしょうか？  
インタビューが終わる頃には、すでに空も薄暗くなっていました。

日が暮れていく中で  
Dieさんのイメージカットの撮影も進めて行きました。

こちらのシーンは、  
街を歩きながら素敵な場所を見つけては撮影、  
それを何度か繰り返して、素材を稼いでいきました。



タクシーの車窓から見た街並み。  
奥に映る団地が、僕の地元赤羽台団地を思い出させる。

海外の街並みはどこを切り取っても画になりますね。  
しかもDieさんというこれまたどこに立たせても絵になる男。

そりゃ撮影もスムーズに進むはずです。

僕も全く迷いなく「ここを歩いてください！」  
「ここに立ってください！」「ここに座ってください！」など  
リクエストしながらカメラを回していきました。

この日の撮影は、  
最初から最後まで行き当たりばったりな感じではありましたが、  
なんだかDieさんとジャムセッションをしているようで、  
とても幸せな楽しい撮影でした。



路地裏にて。  
駐車されてる車でさえもかっこいい。海外はどこを切り取っても画になります。

この日のミッションは無事完了！

撮影終了後、辺りはすっかり暗くなっていました。

そのまま僕とDieさんとたむPは、

薫さんとスタッフの方たちが待つレストランへ向かいました。

ドイツビール(でっかいやつ)と共に

アイスパイン(塩味の豚の角煮のでっかいやつ)や

シュニッツェル(カツレツのでっかいやつ)と

カレーヴルスト(カレー味のケチャップがかかったソーセージのやつ)

など、これぞドイツ！といったフルコースを堪能しました。

その後、御一行はレストランからホテルまで

おおよそ1時間かけて歩いて帰りましたとさ。

(撮影より疲れたかも、、、)



薫さんが待つレストランへ向かう道中の街並み。

どこかわかりませんが、新橋のSL広場やレンガ造りの高架下の雰囲気に近いものを感じました。

翌日、いよいよライブ本番の日がやって参りました。  
この日は薫さんのインタビューとイメージ映像の撮影です。

本番当日ということもあり、  
街や外で撮影できる時間はないのはわかっていたので、  
会場の周辺で撮影することになっていました。

メンバーが到着するまでの間、  
ロケハンついでに会場を隈なく散策し、  
どこでインタビューを撮るか決めていきました。

会場内は常に音が鳴り響いているので  
インタビューの音声に支障が出てしまいます。  
それでは厳しいということで、屋外で探していきました。

昨日とは打って変わって快晴、  
この日は屋外での撮影も問題なくできそうです。  
メンバーはサウンドチェックまで1時間ほど  
フリーの時間があったので、そこで撮影することになりました。  
撮影場所は、会場のスタッフ専用出入り口付近の階段。

先日の舞台挨拶で薫さんは  
「その辺で撮った」とおっしゃっていましたが、

それは否認しませんww

ですが、

今回のインタビューは  
メンバーそれぞれを「自然体」で撮る  
という一貫したテーマがありました。



中でも特にラフなスタイルで撮りたかったのが薫さんでした。

メンバーの中で一番「サブカルチャー色の強い人」。

そんなイメージを僕はお本人に抱いているので、  
「その辺」でインタビューした方が「らしい」だろう  
と考えておりました。

本当に「ただのその辺」だったら、  
「おいおい適当だろ！」と思われてしまいますが、  
ご安心ください、僕なりに考えた「ちゃんとしたその辺」で、  
撮影したのであります。

「ちゃんとしたその辺」というのは、  
薄汚れた路地裏や錆びた鉄骨、ちょっとヤバそうな場所であります。  
そんなイメージにピッタリな場所を見つけたので、  
そこで撮影することにしました。

因みに僕の京さんに対するイメージは「カルト色の強い人」です。

実はこの日、時間が押しておりまして、  
最後までインタビューを聞くことができませんでした。

残りは翌日に撮ろうということになり、  
撮影は終了。

薫さんの衣装と場所が途中で変わるの、  
それが理由であります。

僕らはそのままメンバーの控え室や、リハーサル、  
外に並んでいるお客さんのインタビュー、  
壁の落書き、道端に落ちているゴミ等、  
この限られた二日間で  
どれだけ多くの素材をカメラに収めることができるのか  
わかりませんでした、  
とにかく撮れるものはどんどん撮っていきました。  
1日目の本番も無事に終わり、  
たむPと僕はホテルへ戻って、  
素材チェックをして、そのまま就寝。



会場を出ると、若者たちで賑わっておりました。  
竹下通りにあるような、ケバブなどのスナックを売っているお店が並んでおりました。

翌日、この日は京さんのインタビューと  
昨日撮りこぼした薫さんのインタビューと、  
薫さんによるツアーバス内の案内シーンの撮影です。

因みにこのツアーバス内の案内シーンですが、

なぜだか恒例になっておりまして、

一番最初は、パッケージ化されている

「TOUR12-13 IN SITU-TABULA RASA」のドキュメンタリー映像内で

Dieさんが案内してくれております。

その後、これまたパッケージ化された「TOUR13 GHOUL」の

ドキュメンタリー映像内で再びDieさんが案内しております。

正直、僕自身これは恒例にしないといけないのかな？と

妙な強迫観念に駆られておりました。

もし三度目があり、引き続きDieさんが案内役だったら、

**もはやこれはギャグになってしまう！**

そんな思いもありましたので、

自分自身、今回から封印しようと思っておりました。

なのでDieさんには

リクエストをしておりませんでした。

しかしこの封印も

あのお方の一言で解かれてしまうことになるのです。

それは二日前、

Dieさんの撮影が終わった後の

薫さんたちと合流したレストランでのこと。

薫さんから「明日の撮影、ツアーバスの中を案内しましょうか？」

というお言葉が！

まさに案内役がDieさんから薫さんへ

バトンタッチされた瞬間でもありました。

これは僕にとって、

めざましテレビのメインキャスターが三宅アナから伊藤アナへ

交代するのと匹敵するくらいの衝撃です。

なんとあのシーンは、

食事中の会話から何気なく生まれたシーンなのでありました。

そして翌日のツアー最終日。

薫さんの撮影場所を昨日とは変えて、

会場の裏口にある古ぼけたコンテナの前で撮影することになりました。

コーヒーを持ってコンテナに寄りかかりながら

インタビューに答える薫さんの姿は、とても自然体で好きですね。

やはり薫さんはこういったラフなスタイルが

とても似合っているなと感じました。

インタビューが終わるとそのままイメージカットの撮影です。

搬入口付近での撮影ということもあり、  
画のバリエーションが稼げないと思ひまして、  
ご本人にガッツリとカメラを睨むようなカットなど、  
インパクトのある画を作っていました。

改めて完成した映像を見ると、  
薫さんの言葉とBGMと効果音によって増幅された、  
何か病的な雰囲気のあるシーンになったのではないかと  
自負しております。

そしてツアーバスの中を案内して頂いて  
薫さんの撮影は終了。

この映画で唯一、生活感のあるシーンが撮れたのではないのでしょうか。

僕自身、以前同行させて頂いた、  
ヨーロッパツアーとアメリカツアーのバスを思い出しました。  
今回のバスはその時よりも断然綺麗でしたが、、、。

そしてようやくラストの撮影に突入！

そうです、ラスボス京さんのインタビュー撮影でございます！

撮影場所に関しては、事前にご本人と会話をした際に  
「汚い場所がいいですね」とリクエストを頂いたので、

僕らは会場の敷地内で汚い場所を探しました。

楽屋口の前に、コンテナの上に行ける階段があり、  
そこを登っていくと、

秘密基地のような汚ったない空間が広がっていました。

その場所をご本人に提案したところ、「いいっすね！」と  
快諾していただいたので、ここに決定。

床におが屑が散らばった

秘密基地なのか物置なのかわからない、

その場所に、

ギリギリ使えそうな、錆びれた椅子が捨てられていたので、

その椅子に座ってインタビューに答えていただきました。

発言はご存知の通り、「クソっ！」の連続。

実はこの時、僕は困り果てながらも、

笑いを堪えてインタビューしておりました。

皆さんはお分かりだと思いますが、

これは京さんなりのユーモアと愛に満ちた発言なのですね。

場所を変えて、今度はツアーバスが停まってある、

駐車場の金網に寄りかかりながらのインタビュー撮影。

カメラのセッティングチェンジの時など、

少しの間がある度に映画について雑談する、

そんな楽しい撮影でした。

他の現場でもそうなんですが、京さんとはよく映画の話をします。

リハーサルの時間ギリギリまで話していますね。

朝、現場に行くまでの間、

「今日は京さんとどんな映画の話をしようかな」と

ネタを考えながら向かうことが多いです。

僕も映画に関してはオタクを自負しているのですが、

負けた瞬間は結構あります。

その作品を観ていなかった時なんか、悔しくて仕方ありません。

その場合は帰って速攻観るようにしております。

こんな感じで、

その日の撮影も映画談義をしながら進んでいきました。

イメージカットも、同じ場所で撮影しました。

カット数は少ないものの、一瞬だけカメラ目線があったので、

その瞬間「頂き！」と思って、

本編ではその一瞬を使わせていただきました。

ようやく5人のインタビューとイメージカットの撮影が終わり、

大きなミッションの一つを終えることができました。

実はライブの収録より、

このインタビューとイメージカットの撮影に

プレッシャーを感じていたのであります。

めでたし、めでたし。

ということで、今回は思いのほか、ページ数を使ってしまいました。

次回ラストはどんなことをテーマにするか決めておりません。

写真も使い果たしました。

締切に間に合わせられるのか自信がございません。

今回ページ数を使ったことで、

次回は2ページ程度の内容になるかもしれませんwww

ラスト、どうぞ宜しくお願いします。